参 考 1

平成30年度第３回富山県障害者施策推進協議会の主な意見

日時：平成30年12月19日（水）　午前10時～正午
場所：富山県民会館　701号室

○第４次富山県障害者計画における指標及び数値目標について

・手話通訳者の養成に関して、例年１～３人の合格者であるところ、今回の計画で年５人以上の合格者数を目標とすることについて、厳しい目標ではあるが、行政と聴覚障害者協会が連携し目標の達成に向けて取組を進めてほしい。

・新たに「障害のある人に対する差別があると思う人」という指標を入れたことは非常によかった。県の差別解消条例やヘルプマークについての認知度がまだまだ低いと思うので、調査や周知を図る必要がある。

○第４次富山県障害者計画（素案）に関するご意見と対応

・「コミュニケーション支援の充実」について、「点字、音声、手話、要約筆記、触手話、指点字、代読、代筆・・・」とコミュニケーション手段を列記してあるが、視覚障害や聴覚障害などの障害特性に合わせ、手段をグルーピングして記載したほうがよいのではないか。

・改修された道路には段差がなく、いつ歩道から車道に出たのか分からず非常に恐怖を感じる。視覚障害者にとっては、歩道の段差を解消することが安全な移動に繋がるものではなく、点字ブロックを敷設するか、点字ブロックを敷設しないところには２cmの段差をつけてほしい。

・民間企業においては、特例子会社をはじめ、障害特性に応じた就労環境の整備に向けた努力をしている。行政機関における障害者雇用についても、「能力を十分発揮し活躍できる場の創出」に向けた努力が必要である。

・国の「成年後見制度利用促進基本計画」において、各自治体が成年後見制度利用の要となる中核機関を設置するという目標を掲げている。本計画にも「市町村に対して中核機関の設置を働きかける」旨を盛り込む必要があるのではないか。

・福祉避難所の運営に関して、障害のある人の障害特性に配慮した運営に現場

では不安を抱いているという話を聞く。また、一般の方も福祉避難所へ避難した事例もあり、備蓄の問題や職員体制の問題等、課題が多い。

・学校教育の現場では進学に対する意識を強く感じるが、卒業のその先には就労があるということを生徒に意識づけることも必要だと思う。

・神経難病の領域における医師の役割が高まっている。神経難病の患者さんの家族のためのレスパイトには地域における医師確保が求められるが、神経難病の領域に興味をもつ医師、医学生が少ないという課題がある。

・災害時における対応については、実際に災害が起こった場合を想定し、障害のある人と一般の人との違いを十分に検討する必要がある。

・在宅レスパイトについて、利用者のニーズも踏まえながら、在宅看護に対応できる看護師の養成など対応できる環境づくりを進める必要がある。